韓国文化選書 3

長篇小説

巫女 乙火

金東里 著
林英樹 訳

成甲書房

金東里　(KIM, DONG-NI)
1913年　出生
略　歴　1929年　徽新中4年中退
1955年　徐羅伐藝術大学教授
1972年　中央大学校芸術大学長
1973年　名誉文学博士（中央大学校）
現　在　芸術院会長
著　書　「サバンの十字架」「乙火」「巫女図」
「等身佛」「文学と人間」「文学概論」

林英樹　1919年　出生
略　歴　1935年　中央高普4年中退
1941年　早稲田大学政治経済学部卒
1945年　新聞記者　論説委員
以　後　文筆生活
著　書　「内から見た朝鮮戦争」（成甲書房）
創作「遙かなる〝共和国〟」（三一書房）
創作「銀杏の木よ語れ！」（成甲書房）
翻訳「三国史記」「三国遺事」（三一書房）

巫女 乙火　　韓国文化選書　3

1982年8月31日初版発行　　定価　1000円
著　者　金　東　里
訳　者　林　英　樹
発行者　古　関　周　蔵
発行所　株式会社　成甲書房
〒101　千代田区猿楽町2－2－5
電話03-295-1687 振替東京6-85784
印刷　製本　株式会社　耕文社

落丁本、乱丁本はおとりかえします。
ISBN4-88086-034-4 C0097　¥1000E

韓国文化選書 3

巫女乙火

金東里 著
林英樹 訳

成甲書房

巫女の家 9
二人のハナニム（天神） 20
降　神 54
月光の下 88
乙火巫女 99
乙火巫女の発展 112
教会を訪ねる 117
朴長老 133
胎主婆 147

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

目

次

クッと礼拝 170
ベリテキ 188
外出がもたらしたもの 221
姓をとりもどす 233
生父の家で 243
聖書と刀 264
紙ちょうちん 284
あとがき 293

巫女乙火

巫女の家

乙火(ウルフア)が棠(やまなし)の井戸（城隍堂井戸）まで行って水を汲んできた時、月姫(ウォルヒ)は疲れて深く寝入っていた。棠の井戸とは、彼女の家から一丁は充分に離れている、村の入口の棠の木のそばの大きな井戸である。乙火は毎朝、他人より先にこの棠の井戸に行って、小さな水甕に水を一杯に満たしてしまうと、そこでついでに顔まで洗って帰って来るのであった。

彼女がこのように毎朝、往復二丁以上の距離にある棠の井戸まで行くのも、井戸が深くて大きく、水が清いということもあるが、それよりも、隣りの他人の家の中にある井戸水を、早朝に行って、その家の主人よりも早く汲むことはできないことであったし、その上にまた、その場で顔まで洗って来るということは、到底できないことであったためであった。

頭に載せて運んできた水甕を、かまどの上に用心しておろしておいた乙火は、台所の壁に横渡しに打ちつけた食器棚のすみっこに、大事にあげておいた黒塗りのお膳を下ろして、乾いたぞうきんできれいにふいた。それからその上に、今しがた運んで来た水を真鍮製の飯鉢にうやうやしく汲んで載せて、両手で捧げ持って部屋の中へ入って行った。

今、この乙火が住んでいるこのベッジッヲ（訳注　軒がなく両側に牆栱だけついている家。寺院・神

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

堂などの建物に多い)、神堂の家とも呼ばれるこの家は、一番東側が大きな板の間であり、まんなかがオンドルの部屋、そして一番西側が広い台所であった。

乙火はこの家に移り住んだ時から、一番東側の広い板の間に神壇をつくり、神壇の上の正面の壁には、彼女の信仰主である仙王聖母の女神像をまつり、神壇の上には明図鏡(メント)をはじめとする神物の一切を奉安していた。その後にも、彼女はいろいろな巫神図が手に入り次第、四つの壁にずらりとはりつけた。その他にも、彼女がクッ(訳注　巫女が行う厄払いの儀式)をする時に使う、あらゆる金甌(巫楽器)・巫具、そして各種の巫衣類をすべて順序よく安置しておいた。

しかし、毎朝行う祭儀とか、随時にあげる祝水をいちいち神壇の部屋まで持って行くのが厄介であったので、彼女たち母娘が寝起きするオンドル部屋の一隅に、小さな神壇をもう一つまつっていた。ここでも、彼女の信仰主である仙王聖母女神像はまつらざるを得なかったし、神物としては明図鏡を神壇の上に奉安しておいていた。

乙火が井華水(訳注　早朝一番初めに汲んだ井戸水で、祈禱や漢薬を煎じる時に使う)をお膳の上に捧げ持って、部屋の中に入って来た時も、月姫はまだ死んだように深い眠りの中におちていた。彼女の白い顔の鼻と頬の上には、蝿の群が黒くはいつくばっていたが、そんなのも知らないほど、彼女はまだ深い眠りに落ちていた。

しかし、そのような月姫が乙火の眼にはとまらないのか、あたかも空き部屋でのように、彼女

は彼女の明図鏡がまつってある神壇の上に井華水をあげておくと、ゆっくりと立ち上って手をすり合わせながら（訳注　韓国では、日本でのように、神に祈る時に両手を打たないで両掌をすり合わせる）、祈りはじめた。

仙王聖母さま！仙王聖母さま！福をさずけて下さいませ。どうぞ、どうぞ、禍を追っぱらって下さいませ。仙王聖母さま！大聖母さま！今日も、私たち母娘の糸のようにか細いこの生命を、しっかりと守って下さいませ。守って下さいませ！

仙王聖母さま！大聖母さま！昨夜の夢に、この妾（わたし）を訪ねてきた、大きな角のはえたモンタル鬼（訳注　未婚の男子が死んで極楽に行けずにさ迷っている魂魄）が、どこで生れたモンタル鬼であるのか、どうして来たモンタル鬼であるのか、わたしの家の周りをぐるぐる廻りながら去りませぬ。わたしの家には一歩もふみこめないように、仙王聖母さま！大聖母さまが、オホンと大きなお声で追っぱらって下さいませ！

仙王聖母さま！大聖母さまにお祈り致します。大きな角のはえたモンタル鬼が、このわたしの家には、ちょっとでも近寄れないように、わたしたち母娘に近づいて犯さないように、一里のそとに退くように、十里のそとに退くように、追っ払って下さいませ！追って払って下さいませ！

ねばつくような、しわがれた声であった。彼女はすり合わせていた両手を額の上にあげるや、すらりとのびた腰を折って、三度も礼拝をした。礼拝する度に、上にあげる両手の長い十本の指の間から、両眼の黒い光彩が明図鏡に向ってきらりと輝いた。

そうしている間も、月姫はすやすやと寝息をかきながら甘い夢の中にあった。そのような月姫を乙火は少しもいやがらずに、蒼みがかった顔にかすかなほほえみをうかべたまま、チマ（袴）のすそで、月姫の顔に群がっている蝿の群だけを追い払ってやっては、そのまま外へ出た。心ゆくまで寝て、自然に眼がさめるまで、乙火は娘の眠りをさますことはなかった。

台所の方へ出て来た乙火は、お米を釜の中にしかけた後、もう一つ他の赤いお繕を下ろして朝食の準備をした。お膳にあがるものは、いつも同じキムチ一皿と醤油小皿半分くらいであった。そこに、ごはん三人分と冷水二人分を置くのがすべてであった。

食事の準備をするといっても、乙火がすることは一日に朝食の時だけであった。ごはん一杯を神壇の上にお供えするけれども、それは後で、月姫のおひると夕食の分になるものと乙火は思っている。

しかし、実際においては、月姫は朝食の一膳で三度の分を食べても足りないことがほとんどないために、神壇のごはんはたいがいそのまま残るのであった。

乙火が朝のごはんを釜から移す時、月姫も寝床からおき上った。彼女が一日一度づつきまって

部屋から出て、はきものをはいて庭までおりて来るのは、顔を洗うためであった。彼女は顔を洗う前に、いつも庭にいっぱい生えている雑草をかきわけるようにして、便所へちょっと寄ってくる。

乙火はその間に、月姫の顔を洗う水を洗面器に汲んでおいておく。月姫は母が準備してくれた水で簡単に顔を洗ってしまうと、それを雑草の上にふりまいた後、すぐ部屋の中に入ってしまう。彼女たち母娘は朝起きてからはじめて顔を合わす時でも、お互いに別にあいさつというものはない。

乙火が朝食のお膳をもって部屋の中に入ってきた時、月姫は部屋のまん中に坐って小さな手鏡をのぞいていた。彼女が日がなやることは、絵を画くこと以外には、自分の手鏡をのぞき見ることくらいであった。

乙火はお膳をもって立ったまま、娘にそこをどけろということもなく、酔ったような眼で、娘の顔だけ見下ろしていた。彼女の顔から、このようにまで夢の中のような恍惚としたほほえみがうかぶことは、娘の顔を眺める時だけであった。そんなにも彼女の眼には、月姫の顔が、頸が、肩と腰と脚が、そして身なり全体が、申し分なく美しくきれいに見えた。それはただ美しくきれいであるだけでなく、神秘でこうごうしく感じられた。

月姫が鏡をおいて、からだを動かすと、乙火ははじめて、われにかえったように、お膳を部屋

のまん中においた。そして、最初に盛ったごはんを神壇の上に供えた。
乙火が朝ごはんを神壇にお供えすることは、至極簡単である。ごはん一膳を先の祝水のそばにお供えすれば、それで終るのであった。井華水をお供えする時のように、お祈りをするとか、礼拝をするとか、辞説を長々とあげることは決してなかった。
「今朝のごはんは、ほんとにおいしいよ」
乙火は月姫に向っていった。事実、今日の朝ごはんもふだんとちがうことは一つもなかった。同じ水、同じ米、同じ薪に同じ人がたいた朝ごはんではないか。
それにもかかわらず、乙火はよくこんなことをくり返していうのであった。自分自身のその日の感じからか、そうでなければ、ただ相手の食欲をそそるための目的からであるかも知れなかった。
そのどちらであるかをせんさくでもするかのように、月姫は蒼い月のかけらのような顔で、そのようにいう母をじっとみつめるのであった。しかし、やはり何の表情もないまま、両眼をゆっくりと自分のごはんの上に注ぐと、やがて彼女は匙を持つ。そして、ごはん三、四匙を水に入れると、それを少しづつすくって口へもってゆく。おかずといえば、醤油を匙の先に少しづつつけて口に入れるだけ、キムチを口にすることも二、三度だけだった。
月姫よりは乙火の食物に対する好き嫌いは、そんなに甚しいものではなかった。彼女は自分の

ごはんを半分以上水に入れると、それを匙いっぱいにすくって口に入れ、おかずも醤油よりはキムチを主に食べた。だから、キムチは主に乙火の分、醤油はほとんど月姫の分になるのであった。

月姫が匙をおくと、乙火は月姫の水の丼（ごはんを入れた）を指しながら、

「水も飲みなさい」

と、いった。

蒼い月のかけらのような顔を母に向けていた月姫は、母のいう通り、だまって水の丼をもちあげて三、四ふくみ飲み下した。

すると乙火も匙をおいて、自分の水の丼を持ち上げて飲みほした。

これで彼女たちの朝食は終った。しかし、乙火はいつものように、早く食べ終ったお膳をかたづけようとしなかった。

何か話がまだ残っているかのように、月姫が彼女の蒼い月のかけらのような顔を母に向けると、乙火は、

「かあさんはゆうべの夢に、あるモンタル鬼を見たんだよ」

突然、このように言い出した。

そして、再び両手の、その長い指をみんなのばしたまま、自分の頭の上に載せて見せながら、

「こんなに大きな角のはえたモンタル鬼が、しきりにわたしたちの家に入ろうとするんじゃない

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo